

■内田祥哉

うちだよしちか

治安維持法・1925＝

戦後の日本建築界に、独特の歩みを刻み、広く慕われた。父は、東大キャンパスを設計し総長になった内田祥三。

東京市麻布区新龍土町で、東京帝国大学建築学科教授内田祥三の次男に生まれる。

父は東京帝国大学の営繕部長も兼ねていて、2年前の関東大震災で大きな被害を受けたキャンパスの復興と校舎等の建築に全面的に取り組み、そのシンボルで代表作になった「安田講堂」が竣工した年であった。建築家になる兄祥文とは12歳、姉美柯とも5歳離れていたため、麻布宮村町の父方の叔母のところで、一人っ子のように育ち、近所の子と遊ぶこともない弱々しい子であったが、

麻布小学校に入学、

父が設計した西麻布の新居へ引越し、筈尋常小学校へ転校、ようやく、両親、兄姉とともに暮らすようになると、近所の子どもたちとも活発に遊ぶようになる。学業や絵など、とくに際立つところはなく、

帝人疑獄事件1934＝

日中戦争始・1937＝12歳：

健保+総動員 1938＝13歳：

日米開戦・1941＝16歳：

・・・・1942＝17歳：

創価学会検挙1943＝**18歳**：

年金+総武装 1944＝19歳：

たまたま試験が一番早くて合格した武蔵高等学校尋常科に入学、

武蔵高等学校高等科に進む。

父が東京帝国大学総長になる。父・兄と建築の話をしたこともほとんどなかったが、

盲腸炎で入院して期末試験を受けられず、落第せず卒業するも成績悪く、定員に満たなかった東京帝国大学第一工学部建築学科に入学するものの、勤労動員の毎日で勉強どころでないところ、すでに建築界で実績を築いていた兄が、さまざまなところに連れて行ってくれて年上の人たちの知己を得、

敗戦で、東大キャンパスが、GHQにより接収されそうになったのを父が阻止したという。

兄がくも膜下出血で急逝した後は、皆が大学に寝泊まりするような状態で先輩・後輩と深い交流、のちの活動につながる素地が作られて行くとともに、東大講師になった堀口捨巳から影響を受ける。

卒業。国鉄を希望するも叶わず、銚子なる建築家を擁する通信省に入り、電話電信局担当になる。

「**世界平和記念型堂コンペ**」で佳作、以後も盛んに応募、丹下健三に抗するようになり、常に上位と、

郵政省と分割された電気通信省職員となり、「盛岡電報局」が初仕事。建築家の筋筋は争えず、

***「中央電気通信学園」からは、全面的に任されるようになり、その最初の宿舍1期設計で早くも注目され、**

続けて、食堂・浴場・宿舍2期。**「朝日新聞」に派手に取り上げられて、省から注意される。**

電気通信省が日本電信電話公社になる。「名古屋放送会館競技設計案」、

「名古屋第二西電話局」、

結婚。東京大学非常勤講師、「東京中央学園」クラブ・宿舍3期。**「国立国会図書館競技設計案」は三等、**

「大田区立大森第三中学校」の設計にあたり、東京大学建築学科の古武研究室に出入り、愛媛県八幡浜の松村

正恒設計の「新谷中学校」を知って、現地訪問し「本邦最高」と評価、以後親交、

「霞ヶ関電話局」。**トラスドームの傑作「中央学園」講堂を最後に退職し、東京大学助教になる。**

担当する「建築学大系32学校・体育施設」の小中学校の章で大きく扱い、続く松村の「日土小学校」は{建築年鑑}

に掲載され、{文芸春秋}の「日本の建築家十人」の一人に選ばれている。防火・耐風水害のためと、建築学会大会で木造禁止決議。堀口捨巳からの依頼で、以後10年、明治大学建築学科草創期の非常勤講師。

松下清夫(姉の嫁ぎ先)、太田博太郎(武蔵の先輩)、吉武泰水、高山英華、濱田稔教授らから刺激を受け、

安保闘争とは無縁で、旧制学位の論文提出終了が迫るなか、多くの年長者と同様、駆込みの論文、

「山田邸離れ」。**工学博士となり、ビルディング・エレメント(BE)論を展開する一方、**

「目黒区立第一中学校」。妻の結核と次男の喘息のため、郊外の下高井戸に、***住宅史に個性的な位置を占める「自邸」を建築、妻の出身地の縁で県知事から依頼された「佐賀県立図書館」に、通信省の同僚で設計事務所(第一工房)を開いたばかりの高橋てい(青へんに光)一と緊張して取組み、以後、佐賀県と密接に関係。**

TV宇宙中継始1963＝38歳：

東京リビヰック 1964＝39歳：

「自邸」設計での経験から、「モジュール」を出版、

研究室で、上級生が設計し下級生がつくる、プロジェクト教育{GUP(Group of University's Prefabricati

on Systemu)}を始め、以後10年を超えて継続、

学寮委員になった途端に、大学紛争が始まり、他の教授連と学生らと対峙して行き、

「自ら自信作という「佐賀県立青年の家」、

「安田講堂」事件に至る(父は平然としていたという)。明治大学の授業で学生に建築を紹介すべく自ら撮り貯めた「現代建築写真集」を、一般向けに講談社ブルーバックスで「プレファブ 近代建築の主役」を出版。

部品の性能を高めれば、全体も良くなるという**BE論が、批判され限界も露わになり、**

「東京大学工学部一号館建築学科図書増改築」。***教授に昇格すると、構法計画論を展開し始める。**

***前年落成した「佐賀県立博物館」は、高橋でい一と連名で、第22回日本建築学会(作品)賞。**

父が死去。建設省澤田光英の依頼で、{ハードボード協会}{軽量鉄骨協会}など産業界と関わり始め、設備

ユニット試作競技、パイロットハウス技術考案競技の審査、

「芦屋浜高層住宅プロジェクト提案競技」の審査、

「自邸増築」「原澤邸」。**KEP(公団研究開発)、GSK(学校施設建設システム)、GOD(官庁ビル開発)の委員会、**

{ARGUS}に「現代建築とその技術の紹介」長期連載。**「ハウス55提案競技」の審査委員会委員長などを務め、**

「建築生産のオープンシステム」を発表し、

{GUP}が終わる。学園紛争を総括すべく刊行された東京大学教養講座「学問における価値と目的」では、宇沢

弘文とも交流。***「建築生産のオープンシステムに関する研究」で第28回日本建築学会(論文)賞。町長からの**

依頼で、「有田町歴史民俗資料館」を皮切りに、三井所清典を連れて、再び、佐賀県通い。

学園長太田博太郎の引きで、***母校「武蔵学園再開発」に関わると、澤田誠二とマスタープランを作成し、**

日本建築学会が転換し、木造在来構法部会が設置されて主査。**「個々の建物には若手設計事務所を起用、**

「武蔵大学」中講堂棟以降、諸施設を次々実現して行く。「佐賀県立九州陶磁文化館」で第22回BCS賞、

「武蔵大学」図書館棟。**「続けて、三井所清典と連名で第34回建築学会(作品)賞を受ける一方、有田には韓国**

から無名の陶工のための「先人陶工之碑」を建立。{日本建築セミナー}を設立し、「CHS(センチュリー・ハウ

ジング・システム)高層基本計画」を発表。

「武蔵大学」教授研究棟。**「武蔵大学キャンパス再開発」で第24回BCS賞。**

「自らが最も気に入っているという「有田焼参考館」、

最終講義「システム」の冒頭で学生運動を述懐、東京大学を退官し、明治大学教授になる。{木造建築研究フ

ォラム}を設立し、木造回歸宣言。退官記念に、私家版で「造ったり考えたり」、

退官を機に設けられた内田賞の第1回顕彰。「武蔵大学」科学情報センターと第二学生ホール。

著書「建築施工」。「武蔵大学」五号館。

著書「建築の生産とシステム」「在来工法の研究」。**日本建築学会長(3年間)。**

日本学術会議会員(3年間)。システム化された高層住宅を具体化する大阪ガスの「NEXT21」、

前年落成し、**木造回歸のシンボルとなる「明治神宮神楽殿」で、第36回BCS賞**

「武蔵大学」守衛所。「造 内田祥哉先生退職記念明治大学内田研究室10年の歩み」を贈られて*明治大学を退職

し、{内田祥哉建築研究室}設立。「建築工法計画に関する一連の研究および設計活動による建築界への貢献」

で、第47回日本建築学会大賞。

「武蔵大学」六、七号館、「武蔵高等学校新棟」。金沢美術工芸大学特認教授。

この年認可された行田市の「ものつくり大学」には、構想されて以来、顧問的な役割を果たしてきた。

小泉9.11テロ 2001＝76歳 内田賞は第8回で終わり、翌年に、「日本の建築を変えた八つの構法～内田賞顕彰事績集」が刊行される。

「武蔵大学」八号館を最後に、20年余にわたった「武蔵学園再開発」が終わる。

金沢美術工芸大学客員教授に変わる。「願本寺本堂」。**日本建築学会で{内田祥哉展}が開かれる。**

・・・・

その後、「日本の伝統建築の構法」「建築家の多様」を出版し、{ACe建設業界}に「陸墨」連載。妙壽寺の「東祥苑」

が最後の設計。**建築界唯一人の日本学士院会員になり、日本構造デザイン賞松井源吾特別賞して、**

世界中がコロナ禍のなか、老衰で没した。生前のロングインタビュー「内田祥哉は語る」が遺された。

・・・・2021＝96歳：

権藤智之+戸田穠「内田祥哉は語る」。松村の話のみ、花田佳明「建築家・松村正恒ともうひとつのモダニズム」による、